

おもしろい絵本を見つけてきました。見つけたといっても、自分で探したわけではなくて、新聞で紹介されていて、楽しそうなので買い求めたのです。ヨシタケシンスケ著『このあとどうしちゃう』（ブロンズ新社）です。こんなストーリーです。

「亡くなったおじいちゃんやベットの下のノートがでてきた。中には死後の計画がずらり。このあとのよてい（へてんごくにいく）とよきのかつこう（へいじわるなアイツはきつとこんなじごくにいく）など、9つの願いが並び、おじいちゃんは空を飛び、トランポリン型のお墓をつくって欲しいという夢」を書きのこします。実際に読んで見ないと、この本のおもしろさと深さをはわからないのですが、いったいこの絵本の読者対象は誰なのか。

作者自身が「27歳で母を亡くした時、死について語り合う難しさを実感した」のがこの本を書く動機になったといえますから、直近で身近な人を亡くした方には最適な本です。

でも、ご高齢の方や病床にある人に、「これ、面白いよ」とすすめるのは、ちょっとと思うのです。なぜなら、この絵本の進行役である孫の幼児は気づきます。「おじいちゃんももしかしたらほんとは、すごく、さみしくて、すごく、しぬのがこわかったのかもしれないだから、このノートを、かいたんじゃないだろうか。たのしいことをたくさん、かんがえて、しぬのがこわくなくなるように」。いってみれば、この本は「死の準備絵本」です。準備は心身ともに元気なうちでなければできないので、読者は限られます。

おもしろい絵本と新書を



ところで、死の準備といえば斎藤美奈子著『冠婚葬祭のひみつ』（岩波新書）もおすすめです。かつては児童書の編集者であり、現在は文芸評論家である著者が、これまでに出版されたマナー本を、「形式に流れすぎている。もっといえば、業界のスポークスマンに成り下がってしまった」と鋭く批評するのが気持ちよい。さすが岩波新書、切り口が新鮮です。が、「葬式が仏教と結びついた理由とは」の記述は、言い古された観念的なことばづかいで少し誤りもあるのが残念です。そこは飛ばして読んでいただくとして、「信頼できる葬儀社探しは最低限の危機管理」なんて項目もあります。著者は良い葬儀社探しの方法として、インターネット検索をあげていますが、ネットでは良い業者は見つからないのでは。どの業者も、親切で安価と良い事ばかりを書くのですから。本当のことが知りたければ、寺の住職に聞くことです。だって、住職は色々な葬儀社の仕事ぶりを見ているのだから。

この本、もっと紹介したいのですが、紙面の関係で次回に。なんていっても次回がいつになるかわからないし、買って読んで！といっても、みなさん危機管理意識なんて薄いから、買わないでしょう。

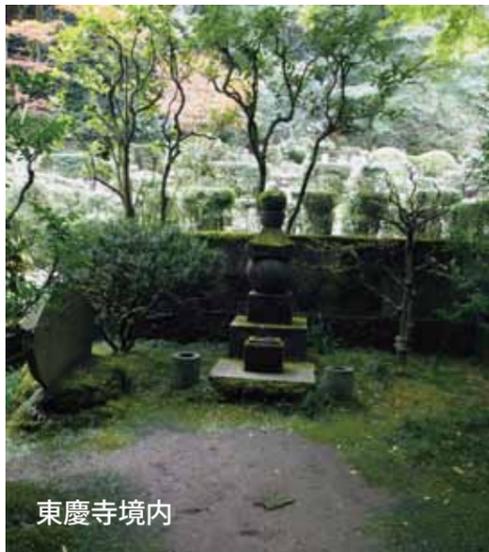
でも、もの凄く大事なことも載っているのです。松岩寺のホームページ（www.shoganji.or.jp）のなかの〈お便りの蔵〉、「H29年春彼岸」の〈3頁〉に、この本の良いところを少し引用しておきますから読んでみて！インターネットがわからない人は、若い人にこれを見せて教えてもらって。それで、よいと思ったら買って読んでみて！

鎌倉散歩（漱石と禅を追いかける）

お正月には4月23日と書きましたが、5月14日に変更しました。その言い訳です。

〈参加希望の方は別紙に申し込み書があります〉

5/14(日) 朝8時半 北鎌倉・円覚寺山門前集合



東慶寺境内

いろいろなテーマを作り、みなさんをお誘いして、さまざまな旅行を企画してきました。

これまでやってきたのは、四国をぐるり八十八か所の遍路満願。次には西国観音巡礼。でもね、遍路巡礼ってずいぶんとお金がかかるし体力もいる。その上、好きな人は好きだけど、まったく興味のない人もいるから、参加する人が限られてしまう。その間、本山・妙心寺への参拝旅行も続けていたけれど、ちょっと気分を変えてみたのが、昭和の実業家で茶人の松永安左工門の追っかけ。平林寺と満開の桜の下の東京国立博物館を散歩して、小田原へも行って、最終的には安左工門の生誕地・九州の壱岐まで行ってしまった。ついでに、日本最初の禅寺・博多の聖福寺をお参りしたのは昨年5月でした。次なる企画はというと、時あたかも夏目漱石生誕百五十年と没後百年の掛け声が聞こえてくるから、今春から来春まで「夏目漱石と禅」をテーマにしてみます。

第一弾は、漱石が坐禅をした鎌倉・円覚寺をたずねます。とって、円覚寺の境内を拝観しただけでは工夫がない。漱石の心情にせまってみなければ、追っかけにはならない。だから、第2日曜日と第4日曜日に鎌倉・円覚寺で開かれるという横田南嶺管長さまの説経会へ参列してみようと企てたのです。

企てたのは良いけれど、松岩寺は京都の妙心寺が本山で、円覚寺にはなじみがない。ならば、様子をうかがいと、

第4日曜の旧年12月25日に下見してきました。日曜日の午前中に寺を留守にするために、坐禅会を休みにして年忌法要もお断りして「いざ、鎌倉へ」。

すると、横田管長さまは第2日曜だけの担当で、第4日曜は他の和尚様がお話したということがわかりました。宗派はちがっても、円覚寺派にも知人はいます。知人に何らかの方法で聞いておけば良かったのですが、円覚寺のホームページを見て、第4日曜日の4月23日と計画をたてたのがうかつでした。やはりネットだけ信じたのではダメなのです。肉声でたずねて、実際に現地へ足をこび、この目で見てこないと。

せっかくだから熱気に包まれた北鎌倉に身をおくために、5月14日（第2日曜日）に変更した次第です。

さて、明治27年暮れに円覚寺で坐禅をした漱石は、二十年後の大正元年9月に東慶寺を再訪します。その時の様子を『初秋の一日』という小品につづります。

「高い石段の上に萱葺（かやぶき）の山門が見えた。〇は石段を上る前に、門前の稲田（いなだ）の縁（まち）に立って小便をした。自分も用心のため、すぐ彼の傍へ行って顰（ひん）に倣（なら）った」。

〇とは同行していた満鉄総裁の中村是公氏のことです。「ヒンに倣う」とは真似をすること。つまり連れションです。その跡と思われる場所に、現在「漱石参禅百年記念碑」という立派な石碑がたっています。

碑文には、その場所が「連れション跡」であることも刻まれています。そんな場所を選んで、石碑を真面目に作った東慶寺の前住職の洒落っ気に、あっぱれ。